

### 【今日の説教から】

新年のご挨拶を申し上げます。

年の初めに天地創造の聖書の箇所を味わいましょう。

「はじめに神は天と地とを創造された」。ここには何も神の起源については記してありません。神様は永遠の昔からおられ、これからも永遠に生き続けるお方、世界の創造の起源であるお方です。ここには「天と地」、「闇と光」、「昼と夜」、「夕と朝」という対極が列記されています。

「地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり…」ここには、原初世界の空虚と混沌、無為と寂しさとが満ち、従ってそれはすなわち闇であったと記してあります。そして、底知れぬ水、底が見えない深淵、地獄のようなどん底の表面に不気味に暗闇が覆っているのです。何という恐ろしい原初世界なのでしょう。そこは光明も命もない世界なのです。

そして、従って、それから、神の霊(息)はその深淵の水の上をホバリングするのです。舞い駆けて巡るのです。親鳥が巣の卵やひなを気にかけて、寵愛して羽で新鮮な風を送って温度を調整して生きる環境を整えるように、聖霊が駆け巡っていました。

ついに神様は「光あれ」と言われ、光が出来ました。そして、従って、神様は光と闇とを分けられたのです。闇は光から隔絶されました。深淵の混沌も、茫洋とした世界も、空虚さもむなしさも、光の後に隔絶されました。ここに光として、人の命として来られたイエス様の贖いを見ます。

皆様、新年のご挨拶を申し上げます。今年も神様のご真実から目を離さずに、信仰から信仰に進ませていただき、以下の御言葉のように成長させていただきたいと願います。

ローマ 1:17 神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる。これは、「信仰による義人は生きる」と書いてあるとおりである。

2 コリント 3:18 わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである。

3:18(新改訳) 私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

エペソ 4:13 わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るためである。

さて、今日は年の初めの礼拝です。それにふさわしく、「はじめに神は天と地とを創造された」と書かれます創世記の御言葉を味わいたいと願います。

「はじめに神は天と地とを創造された」。ここには何も神の起源については記してありません。神様は永遠の昔からおられ、これからも永遠に生き続けるお方、世界の創造の起源であるお方です。

このお方が世界を創造されなければ、この世界は存在しないのです。この世界の始まりは起こらないのです。聖書からそう教わるのでしたら、私たちが神様は存在するかしないかと考えることは、非常に滑稽なことだということが分かります。そもそも私たちはこの神様から創造された者であるにもかかわらず、神様なしには私たちの世界全ては存在しないのに、私たちがその神様の存在をあるやなしやと考えるのは、これこそが本末転倒というばかりなのです。

聖書の創世記から申命記まではモーセ五書と呼ばれ、モーセが神様から啓示を受け、または先祖からの口伝のものを記した(系図等)と考えられています。人が存在する前の出来事、それは神様にしか分からないことです。その事を神様はモーセに直接に神様から啓示されたのです。

2 テモテ 3:16 聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である。

それでは世界はどのようにして造られていったのでしょうか。まず1節に、神様が天と地とを創造されたことが記してあります。

今日の箇所には「天と地」、「闇と光」、「昼と夜」、「夕と朝」という対極の概念が列記されています。

「天」とは、空という意味もあれば、天国という意味もあります。この後の「地」の描写からすれば、目に見える「空」というよりは、目に見えない、「地」と対極をなす世界と考えるほうが良いかもしれません。

2節には、原初世界のようなものが記してあります。

1:2 地は形なく、むなく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた。

「形なく」、これは形なく、混乱があり、非真実で、空虚、混沌の世界という意味があります。茫洋としていて捉えどころのない、混沌として茫漠たる世界。そしてさらに「むなく」と続きます。こういう世界は空虚なのです。生命の躍動がないと言いますか、ただただ空っ

ばなのです。

ヘブライ語の「そして」という言葉にはいろいろな意味があります。

そして、また、従って、そうであるから、それから、まだ、というような意味があります。

混沌と空虚。そしてまた暗闇。これはまた、混沌と空虚、従って暗闇と訳することも出来るかもしれませんが。また、この「暗闇」という言葉には、残忍さ、むごさという意味もあります。この混沌と空虚は、すなわち闇であって、希望ない、命ない、光のない、むごくも残忍なほどに冷酷な、いわゆる世の中の辛い現実というものを指すのかもしれませんが。

人にとって、人生とは、どのような意味を持つものなのでしょうか。生きるという事はどういうことなのでしょうか。

それがただただ、混沌と空虚であり、秩序もなく、光も希望も命も感じられないものであったのなら。ただただ暗闇で、光も意味も感じられないところであったなら。残忍でむごい、そんな、裏切られることばかりでとらえどころのない空虚で混沌なことだらけであったのなら。本当に人生は厳しく、苦しいはずです。

「やみが淵のおもてにあり」 この残忍でむごいまでの暗闇は、深い深い深淵の、底知れぬどん底、そこには地獄があるのではないかというくらいに深いどん底のふちの上を、表面を暗闇は覆っているのです。そして暗闇の向こうに、どれだけの深い地獄にも続くようなどん底が底知れずに横たわっているかは知る由もないのです。大変に怖い、ぞっとする原初世界です。

どうして神様はこんな恐ろしく、武骨な原初世界をお造りになったのでしょうか。そして地に対しては大変に詳述されていますが、天についてはここには記述がないのです。あたかも人の力でははかり知ることのできない世界のようにそびえたっているのです。しかし地の混沌と空虚と闇については、光明なく、いのちの無い様は、いやというほどに書き連ねられているのです。

これがただ単なる段階的な神様の想像の順序であり、今は次にもありますように、光もあり、命もあり、動物も植物も、太陽も星もある七色の世界が作られて今があるというのに、どうしてこの原初世界の混沌に、私たちは何か不気味な、そして今の世界に脈々と連続しているような恐怖を感じるのでしょうか。

「神の霊が水のおもてをおおっていた」

神様の霊、聖霊が登場します。「霊」は、「息」をも意味します。神様の霊は、神様の溢れる息遣いと共に、件の水の上を覆っているのです。覆い動いている、ホバリングしている、親鳥が巣の卵を、そしてひなを心配して巣の周りを飛び巡って、舞いかけて、新鮮な空気を送

って温度調節をして、孵化を助け、ひなを助けるように、神様の意気が、神様の霊が、おどろおどろしい原初世界の上を飛び翔り(とびかけり)、いのちの息を吹きかけておられるのです。ここに私たちは心の底からの救いと平安を得るのです。

あの茫漠とした、とらえどころのない空虚は、混沌は、残酷なまでのむごい暗闇は、見通すことのできない真っ暗などん底は、地獄のようなトンネルは、そればかりで捨て置かれているのではなくて、そこを生きる、青息吐息でふうふうと進む私たちのためには、神様の霊が共にあって、そのどうにもならないどん底にある私たちに、ふうっーっと、息を吹きかけて助けていてくださる、救っていてくださる神様のお姿をここに見るのです。

ヨハネ 20:21 イエスはまた彼らに言われた、「安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」。

20:22 そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、「聖霊を受けよ。

20:23 あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、あなたがたがゆるさずにおく罪は、そのまま残るであろう」。

ローマ 8:14 すべて神の御霊に導かれている者は、すなわち、神の子である。

8:15 あなたがたは再び恐れをいだかせる奴隷の霊を受けたのではなく、子たる身分を授ける霊を受けたのである。その霊によって、わたしたちは「アバ、父よ」と呼ぶのである。

8:16 御霊みずから、わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子であることをあかしして下さる。

8:25 もし、わたしたちが見ないことを望むなら、わたしたちは忍耐して、それを待ち望むのである。

8:26 御霊もまた同じように、弱いわたしを助けて下さる。なぜなら、わたしたちはどう祈ったらよいかかわからないが、御霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなして下さるからである。

8:27 そして、人の心を探り知るかたは、御霊の思うところがなんであるかを知っておられる。なぜなら、御霊は、聖徒のために、神の御旨にかなうとりなしをして下さるからである。

8:28 神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている。

1:3 神は「光あれ」と言われた。すると光があった。

1:4 神はその光を見て、良しとされた。神はその光とやみとを分けられた。

そしてついに光が生まれます。

神様が「光あれ」と仰せになられるだけで、光はすぐに呼応して生まれます。命を育む光。希望の光明。神様はその光を見て、心から、まさしく素晴らしく、喜ばしいもの、価値ある

ものとされました。そして神様はその光と闇とを分けられたのです。

闇は光と隔絶されたのです。光が闇に勝利し、暗闇は光に打ち勝たず、光と闇とは隔絶されたのです。闇がどんなにかその勢力の範囲を伸ばそうとも、光の世界をむしばむことはできないのです。かつては闇ばかりでした。かつては空虚と混沌ばかりでした。残忍なまでの、むごい闇が跋扈(ばっこ)していました。深淵が、どん底が口を開けていました。しかし今は違います。

ヨハネ 1:1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。

1:2 この言は初めに神と共にあった。

1:3 すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。

1:4 この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。

1:5 光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった。

イエス様にある神様の光と命がこの世界に到来しました。そして罪と死の支配とに終わりを告げ、赦しと救い、永遠のいのちがもたらされたのです。

神様の言葉にある力強さを噛み締めましょう。神様の語られるお言葉の、いかに威力のあるものか、救いの力に満ちているのかを噛み締めましょう。そして今年も一年、その力ある神様のお言葉をわが内に頂き、わが人生のうちに、わが家族のうちに実現する御言葉として信じ、御言葉を愛し、御言葉に期待し、御言葉に従って進みゆきましょう。そうすれば、神様はどれだけの恵み深い御業を成してくださるのでしょうか。

マルコ 4:35 さてその日、夕方になると、イエスは弟子たちに、「向こう岸へ渡ろう」と言われた。

4:36 そこで、彼らは群衆をあとに残し、イエスが舟に乗っておられるまま、乗り出した。ほかの舟も一緒に行った。

4:37 すると、激しい突風が起り、波が舟の中に打ち込んできて、舟に満ちそうになった。

4:38 ところが、イエス自身は、舳の方でまくらをして、眠っておられた。そこで、弟子たちはイエスをおこして、「先生、わたしどもがおぼれ死んでも、おかまいにならないのですか」と言った。

4:39 イエスは起きあがって風をしかり、海にむかって、「静まれ、黙れ」と言われると、

風はやんで、大なぎになった。

4:40 イエスは彼らに言われた、「なぜ、そんなにこわがるのか。どうして信仰がないのか」。

4:41 彼らは恐れおののいて、互に言った、「いったい、この方はだれだろう。風も海も従わせるとは」。

◇祈禱；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。原初世界の混沌の姿、とらえどころなく茫洋としていて、地獄を思わせる深い深い底知れぬどん底の水があり、その表面を闇が覆っていたとの恐ろしい、光も命も感じられない描写にぞっとします。しかしそこに神の霊が駆け巡り、舞いかけて命を育み、そして光が出来、光と闇は分け隔てられたとの言葉にほっとします。「命は人間を照らす光であった」とありますイエス様の到来と贖いに感謝いたします。どうぞあらゆる苦しめる方々を神様の救いと平安の中にお導き下さい。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。私たちをお用い下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン